

## [4] 凡 例 解 説

### (1) ブナクラス域自然植生

#### 1. スズタケ-ブナ群団

##### (相観)ブナの高木林

和歌山県に残存するブナ林はいずれもブナ-スズタケ群集と考えられるもので、植生図ではスズタケ-ブナ群団として図示している。

ブナを混交するツガ林の相観を有する森林から、高度を増すに従いブナが優占度を増し、ブナ林の相観を有するこの森林にかわる。しかしながらツガ林がすでに伐採されてブナ林だけが残されているところもある。

おゝむね標高 950~1000m 位からブナ林に移行している。この群集の最も多くまとまって残っているのは護摩壇山でこのほか城ヶ森山や南部では大塔山や法師山の山頂部などに残存している。大塔山頂のものは下部でアカガシ・シキミなどを識別種として、アカガシ亜群集が識別されている。

この群集の主要な構成種としては、高木層ではブナ・ヒメシャラ・コハウチワカエデなど、低木層ではスズタケが優占するものが多いがタンナサワフタギ・シロモジ・ヒメクロモジ・ツルシキミ・カマツカ・トサノミツバツツジなどの混生が見られる。草本層ではコカンスゲの優占するものが多い。

大塔山系ではミズナラを全く混生しない。護摩壇山では大部分が国定公園の第1種特別地域、城ヶ森山のものは県の自然環境保全地域、大塔山では国有林の学術参考保護林としてそれぞれ指定され禁伐林として保護されている。

他に断片的に各地域に残存するものは、特別に保護されていない。

#### 2. ツガ-コカンスゲ群集

##### (相観)ツガの高木林

この群集は冷温帯下部と暖温帯上部にまたがる推移帯に成立する群落である。大部分は標高 800m から 1000m 位までの急傾斜地・尾根・岩角などに成立するが、時には下部の溪畔林においても見られる。

高木層はツガが優占し、草本層ではコカンスゲの優占度が高い。また低下層にスズタケの密生するものが多い。

群集の標徴種及び識別種はツガ・アセビ・ツルシキミ・コカンスゲなどである。

この群集の主な分布地は高野山・京大和歌山演習林・亀谷・西ノ河・大塔山・四ノ谷などである。西ノ河のものは、斜面下部の谷部のもので溪畔ではサワグルミ群団に近い組成となっている。

高野山は金剛峯寺の禁伐林，西ノ河・亀谷は県の自然環境保全地域，京大演習林のものは大学の学術参考保護林として保護されている。他のものは保護措置が取られていない。

### 3. ヒノキーシャクナゲ群集

(相観)常緑針葉樹の高木林または常緑針葉樹と常緑広葉樹混交の亜高木林

土地的極盛相のもので，尾根すじ・急傾斜地・崖地などに成立している。大塔山系・四ノ谷・果無山脈・那智山・白見山・西ノ河その他多くの山地にブナクラス域からヤブツバキクラス域にかけて見られる。

南部の方が地形が峻険でやせ尾根なども多いため遙かに多く分布している。断片的なものから帯状にまとまりあるものまで種々あり，植生図で図示できないものも多い。また法師山など再生林が多いがこの群集に図示している。

標徴種及び識別種としては，ホンシャクナゲ・ヒノキ・コウヤマキ・ヒメコマツ・コアブラツツジ・クロソヨゴなどがあげられ，ツガーアセビ群集とされるものである。

中部以北のものではヒノキやコウヤマキを欠くものが多い。また南部ではウバメガシやウンゼンツツジ・トガサワラなどをともなうものがある。

## (2) ブナクラス域代償植生

### 6. ブナーミズナラ群落

ブナクラス域の伐採後に生じた再生林またはブナの択伐林である。従って相観的にはミズナラ林といえるものからブナ林に近いものなど広く含まれる。果無山脈の稜線部のはブナ林に近いものであるが，択伐されたものかかなり荒れているのでこの群落に入れた。

箕峠や鈍尖岳周辺の稜線部並びに護摩壇山のスカイライン沿いの稜線部に部分的に見られるものはミズナラ林の相観を有するものが多い。また若藪山・石堂山・白ヶ岡山などの稜線部にも帯状に残されている。

この群落の主要構成種は，高木層ではミズナラ，亜高木層及び低木層ではコハウチワカエデ・シロモジ・アオハダ・ネジキ・タンナサワフタギ・リョウブ・コバノガマズミ・ヒメシャラ・コアジサイなどがあげられるがツガやモミをまじえるものもある。

### 7. アカシデーイヌシデ群落

(相観)落葉広葉樹の高木林または亜高木林

多くは急傾斜地や尾根筋の造林不適地などに見られる二次林で，ブナクラス域からヤブツバキクラス域に連続して成立する。谷筋では標高400m位の低い所でも見られる。

群落の組成は多様で，ミズナラやコナラなどと混交しミズナラ林やコナラ林と連続

するものがある。

構成種はアカシデ・イヌシデ・クマシデ・リョウブ・ウリハダカエデ・エゴノキ・ツリバナ・ヒメシャラ・ウラジロノキ・コアジサイ・コガクウツギ・ウラジロガシ・ヤブムラサキ・ウツギ・イヌツゲ・ヤマツツジ・シラキなど多様で標高の低いものはツガ・サカキ・ヒサカキなどをまじえる。またアカシデ・イヌシデがクマシデに代っている群落や、シデ類が必ずしも優占しなくとも低山上部や山地で群落区分の不明確な落葉樹林でシデ類の出現するものは植生図でこの群落に図示している。

### (3) ヤブツバキクラス域自然植生

#### 10. モミ・シキミ群落

(相観)ツガ・モミの高木林

標高凡そ600~900mの斜面やゆるやかな尾根に成立する中間温帯の群落である。北は高野山の摩尼山、弁天岳から中部の城ヶ森の京大和歌山演習林・西ノ河・亀谷、さらに南部では果無山脈の水上や笠塔山・北山の四ノ谷などが代表的な分布地で、これらは極相林ですぐれた自然林を形成している。

弁天岳や亀谷・西ノ河などではツガがいちじるしく優占し、ツガ亜群集と考えられるものである。他の地域のものもおおむねツガが優占し、モミの優占するものは少ない。

京大演習林にはいちじるしくモミが優占するが、シキミを欠くものがある。

この群集の模式的なものの主要構成種はツガ・モミ・ヒメシャラ・イワガラミ・シキミ・アセビ・ツルシキミ・クロモジなどで四ノ谷ではトガサワラやスギなどを混える。

西ノ河・亀谷は県の自然環境保全地域に指定されている。京大演習林では学術参考林として保護されている。また高野山のように社寺林として保護されているものがあるが、すぐれた自然林と見られるものは早急に保護策が講ぜられるべきである。

#### 11. サカキ・ウラジロガシ群集

(相観)ツガ・モミの高木林または常緑広葉樹の高木林

標高300~850m位の適潤な斜面に成立する群落で、下部でコジイ・サカキ群集と区別し難いものがある。本県の低山地における代表的な自然林である。極相林またはこれに近い森林は多くはないが四ノ谷・白見山・大塔山などで見られ、これらは林冠でツガやモミが超出しツガ林の相観を有する。

大塔山系などで各地で広く見られるのは再生林で、林冠にツガやモミを超出するに至っていないものが多いが、これらも生物の良好な生息環境を成しており、植生図でこの群集に図示している。

中間温帯林のモミ・ツガ林の発達するところでは、標高600~700m位からモミ・ツガ林に移行しているが、中間温帯の発達の不透明なところではかなり上(標高850m位)まで上ってアカガシ林などに続いているがこのようなものは再生林に多い。アカガシ林は環境庁の凡例集にもとづきサカキ-ウラジロガシ群集に図示している。

サカキ-ウラジロガシ群集の主な構成種としては、ウラジロガシ・サカキ・ツクバネガシ・シキミ・アセビ・シラキ・ツガ・モミ・イヌガシ・ヒサカキ・ヤブツバキなどが挙げられる。イスノキやモチノキなどによりイスノキ亜群集として識別されるものがあるが多くはない。

この群落は植林適地のかなり低いところに立地するので、保護策を講じる必要がある。

## 12. サカキ-コジイ群集

(相観)常緑針葉樹常緑広葉樹混交の高木林, 常緑広葉樹高木林

この群集は坂泰山・水上・古座川源流域・和田川峡・白見山・那智山・瀨峡など南部熊野地方の溪流沿いの各地に残されている。また中部以北では社寺林に見られるだけで海南市の宇賀部神社・春日神社や下津町の長保寺などは、その代表的なもので、県下の社寺林でこの群集に属するものは各地に見られる。

この群集は丘陵地や下部低山地の斜面から稜線へかけて成立し、本県の下部低山地の代表的な自然群落の一つである。低山部の極相林は林冠にツガやモミをまじえる。

サカキ-コジイ群集の標徴種であるシャシャンボやソヨゴを欠きコジイ-クロバイ群集に属すると思われるものや中間的なものが多いがすべてサカキ-コジイ群集に一括した。

主要構成種としては、高木層ではコジイまたはツガが優占し、サカキ・カナメモチ・リンボク・トキワガキ・クロバイなどが高木・亜高木層に多く、低木層ではサカキ・クロバイ・タイミンタチバナ・イズセンリョウ・ヤブニッケイ・ヒサカキ・アラカシなど、草本層ではコバノカナワラビ・キジノオシダ・ヤブコウジ・ベニシダ・センリョウ・アツミカンアオイ・シュンランなどが目立つ。

瀨峡や那智山のようにすでに風致保安林や国指定の天然記念物に指定されているものもあるが、貴重な自然林であるので保全措置が講ぜられるべきである。

## 13. ホルトノキ群落

(相観)常緑広葉樹の高木林

ホルトノキは和歌山から新宮に至るまで沿海地の社寺林によく見られるものであるが、そのうち優占度の高いものをホルトノキ群落として図示した。タブ林系列の森林と考えられ、人類文化と競合する地域に成立する群落であるので多くは破壊され社寺

林にだけ残されたものと思われる。

ホルトノキ群落と考えられるものは木本・大年・立・三所などの神社林のほか神島などがある。

主な構成種としてはホルトノキ・ミミズバイ・タイミンタチバナ・イヌマキ・カゴノキ・ヤブニッケイ・シロダモ・カクレミノ・ヤブツバキ・テイカカズラ・ホソバカナワラビ・フウトウカズラなどが挙げられる。

保全上の留意事項としては林内立入りを制限すべきである。

#### 14. ミミズバイースダジイ群集

##### (相観)スダジイの高木林

ホソバカナワラビースダジイ群集と接してまたは共存して成立するものも多いが、これらは植生図では何れかにまとめて図示した。

沿海地の照葉樹林自然植生の代表的なもので、紀伊半島東部では宇久井海岸の目覚山や太地海岸、紀伊半島南端の大島、西部では稲積島や江須崎のシイの極相林がこれに当る。

いずれも高木層でスダジイが優占するが、主要構成種はスダジイ・タイミンタチバナ・モチノキ・ヒメユズリハ・ヤブニッケイ・ミミズバイ・ヤマモモ・カクレミノ・モッコク・ヒサカキ・シロダモなどで、草本層は林床の乾湿によって異なるがテイカカズラが多く、センリョウ・マンリョウなどの小低木のほかベニシダなど、また大島や目覚山ではアオノクマタケランが見られる。

サカキカズラ・テイカカズラ・フウトウカズラなどは樹幹に高く上っている。大島(櫻野)ではミミズバイは見られず、また稲積島ではタブ林の要素を含む。

魚付保安林や社寺林として保護されているものが多く、また稲積島や江須崎は国指定の天然記念物として指定されている。

保全上の留意事項としては観光用の道路をつけるため損傷されないよう、また人里に近いので入林を禁止し、火災予防、ゴミの投棄・植物の採取などに万全の措置を講ずべきである。

#### 16. タブ群落

##### (相観)常緑広葉樹の高木林

タブノキは海に近い低地の二次林や社寺林によく混生している。また海岸林などでスダジイと混生し、タブ林ともスダジイ林とも区別のつき難いものもあり、暖温帯のタブ・シイ林の組成の複雑さと連続性が示される。

しかしながら、タブ林域の開発されつくした現在、明瞭にタブ群落と判定できるまとまりある自然植生は極めて少ない。

県南部の沿海の神社林や島嶼（蟻島・鹿島・九龍島・大島など）の数ヶ所に見られるにすぎない。

主な構成種はタブノキ・モチノキ・イヌマキ・ヤブニッケイ・ヒメユズリハ・カクレミノ・ヤブツバキ・イヌビワ・オオバグミ・フウトウカズラなどで、時にホルトノキ・オガタマノキ・スダジイ・クロガネモチなどの大木やヤマアイ・アオノクマタケランなどの草本をともなう。美沢町三尾の龍王神社はスダジイ林と区別つき難いがタブ林として図示した。また高野山の中腹（標高 500m）にある矢立の墓地林はタブノキを優占する森林であるが、組成的に問題があり人為もあるので、タブ群落として図示していない。

#### 17. ウバメガシ群落

（相観）ウバメガシの亜高木林・低木林・針葉樹の高木林

ナラ類で常緑となる唯一の例外であるウバメガシは、主として海岸に生える樹種として知られるが、また土地的極盛相の特殊な植生をつくっている。

本県では海岸線の崖地から急斜面・尾根部などに広く分布するが、さらに内陸部に点在する崖地や急斜面・岩尾根などに見られ、奥地のかなり高所まで入っている。

ウバメガシ林は薪炭林としてすぐれているため相当のけわしい崖地でも伐採された形跡があり、内陸では自然植生として残存するウバメガシ群落は極めて少ない。

県下でまとまって残されている地域は勝浦・大島・枯木灘（日置川町・すさみ町）・日ノ岬周辺などの海岸の海食崖や島嶼などである。

内陸で見られるものは植生図で図示できないほど小さい群落が多い。

海岸線で見られるウバメガシ群落は、樹下にモッコク・タイミンタチバナ・トベラ・マルバシャリンバイ・マサキ・ナワシログミ・ツワブキ・ヒトツバなどをともなうことが多い。時にイブキをまじえるものがある。

海食崖では風衝低木をなすが、ウバメガシトベラ群集と見られるものが多い。内陸のものでもタイミンタチバナ・モッコク・ヒトツバなど共通しているものも見られる。南部の内陸の低山にあるものはコバンモチ・ウンゼンツツジ・アセビ・イワヒバなどをともなう。

海岸のものは魚付保安林として保護されているものが多い。

#### (4) ヤブツバキクラス域代償植生

#### 18. コナラ群落

（相観）落葉広葉樹の高木林・亜高木林

コナラ群落は主として県中部以北に分布、この地域ではアカマツ林とともに丘陵及び低山地の代表的な二次林である。近年マツクイムシの被害を受けたアカマツ林から

移行したものも多い。

植生図ではクヌギ・クリ群落を併せコナラ群落として図示した。

クヌギ・コナラ群落は集落周辺部の丘陵で見られ、薪炭のほか畑・水田の堆厩肥源として使用されたものである。

ヤブムラサキ・コナラ群集は丘陵地帯から低山地に及び、コナラ・クリ群落は低山地からブナクラスの二次林に接している。アカシデ・イヌシデ群落と連続して区別のつき難いものも多い。

主要構成種はコナラ・クヌギ・ネズミモチ・モチツツジ・ヤマモモ・ヒサカキ・クリ・ハゼノキ・ヤブムラサキ・ベニミダ・コウヤボウキ・ソヨゴ・コバノガマズミ・ネジキ・サルトリイバラ・ベニシダなどである。

丘陵部のはモチツツジ・アカマツ群集と共通した構成種を含む場合が多い。またコナラ・クリ群落ではリョウブのほか山地性の植物の混生が多くなる。

コナラ群落は従来薪炭林として利用されてきたものであるが、現在は利用されず放置されているものが多い。

## 19. シイ・カシ萌芽林

(相観)常緑広葉樹の高木林・亜高木林

シイ・カシ萌芽林は県下の暖温帯域に広く分布が見られるが、日高川を境として北部と南部を比較すると南部の方が遙かに多く分布している。

温暖多雨の気候と、北部のように収奪による土壤の瘠悪化が進んでいないためと思われ、殊に田辺以内はアカマツ林がいちじるしく減少する反面シイ・カシ林の増加が見られる。

県下のシイ・カシ萌芽林には、スタジイ林・コジイ林・アラカシ林・ウラジロガシ林・アカガシ林など各種のタイプがあり、これらが複雑に混生する部分が多い。

主要構成種は低山地のものをあげれば、コジイ・タイミンタチバナ・サカキ・アラカシ・ウラジロガシ・リョウブ・アセビ・ヤマザクラ・カナメモチ・ヤブツバキ・ヒサカキ・クロバイ・リンボク・コバノカナワラビ・ベニシダ・ヤブコウジなどである。

高度を増すに従ってコジイやタイミンタチバナ・シロダモなどが減少し、ウラジロガシ・ツクバネガシ・アカガシ・コガクウツギなどが増加する。コジイは標高300~400m位からいちじるしく少くなりカシ林に移行する。

北部では一般にコジイ林よりもアラカシ林が多くみられるが、過度の伐採によるコジイ林からの分化が考えられる。

なお沿海のスタジイの萌芽林は、タブ林に近い要素を混生する。

南部の内陸部には広域にシイ・カシ萌芽林が残され、二次林であるが生物の良好な生息圏となっているところがある。

## 20. タブ・ヤブニッケイ幼林

(相観)常緑広葉樹の高木林・亜高木林

ヒメユズリハ・ヤブニッケイ萌芽林をこの凡例に含めた。むしろこの萌芽林が大部分である。

友ヶ島をはじめ沿海地の山火事あとや薪炭林等で比較的適潤なところに成立する二次林で広く県下の沿海地に見られるが模式的なものはそれほど多くない。下津・田並・宇久井・大島などに見られるものは模式的なもので、主な構成種はヤブニッケイ・ヒメユズリハ・カクレミノ・シロダモ・イヌマキ・モチノキ・ネズミモチ・ヒサカキ・イズセンリョウ・イヌビワ・ホソバカナワラビ・イタチシダの類などシイ林やタブ林の要素を含むものである。

日高郡の北部沿海地にはアカマツ林やクロマツ林から移行したと思われるもので優占するほどでないがヒメユズリハやヤブニッケイ・タブノキなどをまじえ群落区分のやゝ不明確なものがかかなり広範囲に見られるがこれらはこの群落で図示している。

## 21. ウバメガシ萌芽林

### 720 シイ・カシ萌芽林→ウバメガシ萌芽林

720 シイ・カシ萌芽林からウバメガシ萌芽林を区分した。

ウバメガシの萌芽林は県下の海岸や近海地の丘陵や低山地で顕著な群落でことに県南部に多い。海岸の風衝地・南向きの急傾斜地・崖地や岩尾根などに多く見られ、低木乃至亜高木林となっている。本県では内陸まで浸透して分布し、15~30年に一度の割合で伐採され備長炭など薪炭用に利用されてきた。

海岸に近いものはトベラ・シャシャンボ・タイミンタチバナ・モッコク・ナワシログミなどをともなうことが多いが、丘陵や低山地ではモチツツジ・ネジキ・ヒサカキ・サルトリイバラ・コシダ・シャシャンボなどを識別種とするウバメガシ・コシダ群集が広く見られる。

## 22. ダンチク群落

暖地性の植物で県下一円の海岸線に多く、防風用に植栽されているものも見られる。また川に沿って山麓部まで広がっている。しかし大部分は単木的に分散している場合が多く、植生図にあらわれる程度の群落をつくることは稀である。大群落に発達している地域は、串本町の西部田ノ崎や鏑浦付近であって、こゝではその長さが1~2 kmに及んでいる。美浜町の三尾でも大きな群落がある。

ダンチクは大きい株となって多数叢生し密生した地域では他の植物の侵入が少ない。この群落内に見られる植物はハマオモト・フウトウカズラ・ハマヒルガオ・ハマウド・クサスギカズラ・オニヤブソテツなどであって、時にはトベラ・タブノキ・ヤブニ

ケイなど樹木の若苗を見ることもある。

## 23. ススキ群団

### (相観)高茎禾本草地

ススキ群団に属する群落は県下各地の河川の堤防・河川敷・山火事跡・山脚部の草地・耕作放棄の山地畑・植林栽植初期の放置林・山地の尾根筋・カヤ場あとなどに広く見られるものである。

チガヤ・ススキ群集・ネザサ・ススキ群集・低木・ススキ群落や非イネ科の高茎草本と混生するものなど多種多様であるので、植生図ではススキ群団として一括して取扱った。面積も図示できないほど小さいものがほとんどである。また植林中にススキの生い茂ったものは植林の方に図示した。

生石高原はその最も広大なもので、標高750m位から870mの頂上にかけて、広く拡がっている。土壌もススキ草原に起因すると思われるクロボク土壌となっている。もとカヤ場として利用されたものであるが、現在は低木の侵入が多く見られる。県立自然公園に指定されレクリエーション地として利用されている。

こゝではススキがいちじるしく優占するほかモミジイチゴ・ニガイチゴ・ヘクソカズラ・サルトリイバラ・オカトラノオ・ヤマウルシ・イヌザンショウ・コナラ・ダイセンヤナギ・ミツバツグリ・イタドリ・フモトスミレ・アゼオトギリなどが目立つ。

なお、和歌山市紀三井寺の名草山の中腹以上は、ネザサの優占するネザサ・ススキ群集となっている。

和泉山脈の根来や美浜町の西山などにはかなり広い山火事あとのものがある。

## 24. シバ群団

### (相観)シバ草地

まとまったものは極めて少ない。本州最南端の潮岬に広い草地がある。ふみつけられてシバ草原として発達したもので、わい化したチガヤ・スズメノヒエ・ハチジョウススキ・コナスビ・ツボクサ・ツリガネニンジン・センニンソウ・ワレモコウ・チドメグサなど多くの草本を混生し、シバ・ツボクサ群集と判断される。

生石山の稜線部にも小面積のものがああり、チカラシバ・ナギナタガヤ・ヌカボ・メドハギ・チガヤ・シロツメグサ・オオバコなどを混生する。

## 25. モチツツジーアカマツ群集

### (相観)アカマツの高木林・亜高木林

アカマツ・広葉樹混交の高木林・亜高木林

本県ではアカマツ二次林は県下に広く分布しているが、近年マツクイムシの大発生

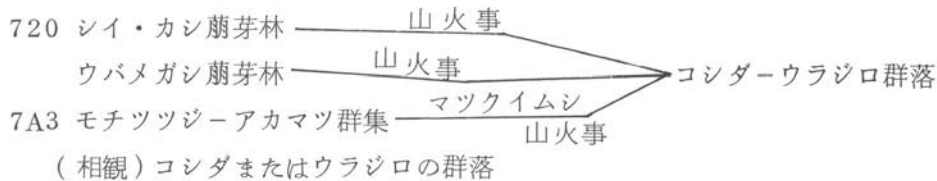
によりその面積はいちじるしく減少し、林相も多様となっている。

常緑樹をともなう常緑樹林への遷移途中のもの、陽性の低木や草本の混生したもの、コナラなど落葉樹を混生するもの、貧養の尾根などに見られるハナゴケをともなうものなど各種の段階のものがあり種組成も多様であるが、本県のアカマツ林は大筋としてモチツツジ-アカマツ群集として考えることが適当であると思われる。

この群落は内陸部や南部にも分布するが大きなまとまりは少ない。しかし、田辺市付近より以北の近海地並びに紀ノ川中流域の丘陵地・低山地では主要な群落となっている。近年マツクイムシの大被害を受けて広葉樹林に移行したものが多いが、高木が枯損して相観が変わっても、低木が残って組成的にモチツツジ-アカマツ群集と考えられるものも多い。

モチツツジ-アカマツ群集は人里近い丘陵や低山に立地するので人為の干渉の度合や土地の肥瘠によりその組成は種々である。一般的なタイプでは、主な構成種はアカマツ・ヤマモモ・ハゼノキ・クロバイ・タイミンタチバナ・ウバメガシ・ヒサカキ・モチツツジ・ネズミモチ・ネジキ・コナラ・シャシャンボなどで、草本層にはコシダ・ウラジロなどの優占するものが多い。

## 27. コシダーウラジロ群落



コシダ・ウラジロは共に西日本の代表的な林床シダ植物である。やゝ乾性の肥沃でない土地に群生する陽性の植物で、照葉樹が生い茂ると日光の不足などにより減少する傾向がある。しかし、このような照葉樹林でも、伐採や山火事によって森林が破壊されると、再び広がって時には独占的に長期間にわたって山肌をおろうことがある。山火事の場合はススキ草原になる場合とコシダーウラジロ群落になる場合とがある。アカマツ林でマツがマツクイムシにより枯死してこの群落に移行したものも多い。北向き斜面下部や谷筋ではウラジロが優占する傾向がある。

この群落は密生しているので、他の植物の侵入は困難で、多く見られる混生植物はザルトリイバラ・アケビ・ナツフジなどのつる性植物であるが、個体数は少なくいずれも常在度は低い。その他この群落が発達するまでに生育した植物がわずかに見られる。

(5) 河辺・湿原・塩沼地・砂丘植生（各クラス共通）

55. ヨシクラス

（相観）ヨシ群落

各河川の河口やこれに接する下流域に抽水あるいは湿地性の独占的な大群落を成していたが、河川の改修などのために近年いちじるしく減少した。しかし日高川河口などでは今なおかなり見られる。

28. ツルヨシ群集

（相観）ツルヨシ群落

河川の中流から上流にかけて、河床の多湿な砂地や小礫地には、ツルヨシが長いほふく枝を出して独占的に優占した群落をなしている。

群落の組成は極めて単純で優占するツルヨシにヨモギ・イタドリ・ミゾソバ・ススキなどをまじえる。

29. 河川敷砂礫地植生

850 ツルヨシ群集

河川敷砂礫地植生

860 オギ群集

ツルヨシ・オギ・ヨシ以外の高茎草本群落を区分

830 ヨシクラス

（相観）高茎草本群落

河川敷の砂礫地では、砂と礫の比率は多様であり、その比率により植生も異なる。河川敷は種々雑多の群落より成り、これを植生図で細かく図示することはできないので、一括して河川敷砂礫地植生にまとめた。

礫の多い部分には、ナギナタガヤ・オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ・オオマトヨイグサ・メドハギ・ヒロハホオキギク・コマツヨイグサ・ヤハズソウなどの比較的乾燥に強い植物が多い。肥沃な砂土の堆積の多い部分には、ススキ・チガヤ・イタドリ・ヨモギ・クズ等が多くなり、堤防の植生に近づく。近年セイタカアワダチソウの侵入が見られる。

30. 塩沼地植生

（相観）高茎草本群落

県下各地の河川の河口や内湾などに見られる。

御坊市の日高川河口や那智勝浦町のゆかし瀧の瀧口付近のものが最も顕著なものとして挙げる事ができる。

日高川河口では河床の土質の状況によって生育する塩沼植物は異なるが、アイアシやシオクグなどはそれぞれ独占的に優占する大きな群落を成している。ホコガタアカ

ザヤイソヤマテンツキ・ウラギク等は河床の砂礫地で生育が見られる。

ゆかし瀉のものは、フクド・ハマサジ・ヨシ・シオクグ・イソヤマテンツキ・オニシバなどから成り、フクドの純群落と思われるものもあり、それぞれ河床の小礫をまじえる砂泥地に成立している。

### 32. ハマボウ群落

(相観)ハマボウ(落葉広葉樹)の低木林

この群落は和歌浦・日高川河口・切目川河口・富田川河口・太田川河口・那智勝浦町湯川・新宮市三輪崎の孔島などで見られる。

自生地は主として河口または入江などの泥土堆積地で、満潮時に地下部が汽水にひたるものが多い。

日高川河口と太田川河口のものをもっとも大きな群落で特に日高川河口のものは全国屈指のものである。他の地域のは植生図で図示できない。

日高川河口のものは樹下にアイアシをまじえるだけの単純な群落であるが、太田川のは樹間にヨシ・カモノハシ・チャガヤツリ・チガヤ・ヤマイ・サンカクイ・ギンギシ・テリハノイバラをともなう。

御坊市では天然記念物に指定して保護している。近年ハマボウの群落は港湾や河口の改修・周辺部の開発のため減少しつつあるが、御坊市のように保護措置が必要である。

### 56. 砂丘植生

(相観)草本群落

砂礫の平坦に安定して堆積する砂礫海岸の植生である。各地にあるが図示できるほどのものは多くない。主なものとして日高町の阿尾海岸や美浜町の煙樹海岸及び御坊市塩屋の海岸などがあげられる。

砂と礫の割合や汀線からの遠近によって異なるが、ほふく性のハマヒルガオ・コマツヨイグサ・ハマエンドウのほかコウボウムギ・ピロウドテンツキ・ハマアザミ・ハマボウフウなどが単一にまとまった群落または混生した群落を成している。またハマダイコン・ハマウド・ハマオモトなどの大型の草本も見られる。

## (6) 植林地・耕作地植生

### 34. アカマツ植林

全県下的には少ないが、最も多く見られるのは伊都郡である。図示できるほどまとまったものはまれである。また二次林のアカマツ林と区別し難いものもある。金屋町の宇井の奥の白馬山の山脚部にはかなりまとまったものがある。

### 35. クロマツ植林

紀泉山脈の西部はもともとはげ山が多く、沿山の施策としてクロマツが多く植林されたということで広範囲に図示した。しかし、こゝでは現在クロマツ林の中に自然下種されたアカマツが大きくなってクロマツと交代しつつあるものやアイグロマツ等も多く見られ、これを区分して図示するにはかなりの困難があった。なお山地へのクロマツの植林は、他に少しではあるが戦後の植栽と思われるものが県下各地に見られる。これもマツクイムシの被害により枯死したものや山火事で焼けたものもあり図示できるものは非常に少ない。

海岸防風防潮林として煙樹ヶ浜に約80haのものがあるがこのうち一部はアカマツ林である。若令のクロマツ防潮林は枯死した壮令林にかわって各地の海岸で見られる。

### 36. スギ・ヒノキ植林

人工林化の進展によりスギ・ヒノキの植林は多く、県下で最大の面積を占める植生単位で、県下の中部から南部にかけての山地の大半を占め、内陸では一大造林地帯を形成している。

スギとヒノキではそれぞれ植栽する立地を異にするが、県下の植栽面積は現在同じ位である。日置川筋はヒノキ林が多いようである。

スギ林はヒノキに比し成長も早く、手入れも行きとどいている。スギ林の林内植生としては次のタイプに分けられる。

- a. ウラジロ密生タイプ
- b. カシ林要素タイプ(イヌガシ・ツルシキミ・ヒメクロモジ・アセビ・サカキ等)
- c. コジイ林タイプ(カナメモチ・サカキ・タイミンタチバナ・クロバイ・ヤブニツケイ・ヤブコウジ等)
- d. タブ・イチイガシ林タイプ(アオキ・カゴノキ・イヌマキ・コバノカナワラビ・ホソバカナワラビ・シロダモ等)

ヒノキ林の林床植生は貧弱・乾燥型で、コシダ型が多く、ウラジロを混生する。アラカシ・アセビ・タイミンタチバナ・ヒサカキ・クロバイ・モッコク・サカキなどが目立つ。

### 57. 外国産広葉樹植林

(相観)常緑広葉高木林

昭和31年頃パルプ用材林として日高町・南部町・川辺町などを中心に造林されたユーカリ林でグロブラス種が大部分のようである。初期生育はよいがその後の生育は芳しくなく、現在日高町と川辺町に若干の植林が残されているだけである。